



Title	人間的現存在における理解と時間性：前期ハイデガー存在論の一側面
Author(s)	佐々木, 正寿
Citation	カンティアーナ. 1993, 24, p. 53-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66718
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人間的現存在における理解と時間性

——前期ハイデガー存在論の一側面——

佐々木 正 寿

近年の動物学によれば、それぞれの動物にはそれ固有の時間
が想定されうることである。そもそも私たちは、時間と
いう概念をあまりにも広く無差別的に用いているのではなから
うか。もともと時間という事柄は、人間の存在とともに生起す
る事柄であると思われる。このように考えれば、人間的現存在
に固有の時間という事柄が、その存在体制に即して規定されう
るはずである。ところで、ハイデガーに従えば、現存在は自ら

の存在を関心の的にして在るといふ仕方です。現存在は自ら
のような実存性 [Existenzialität] が現存在の本質である。しか
も、現存在の実存を構成するのは、理解 [Verstehen] という
根本的な存在様式である。それゆえ、現存在に固有の時間とい
う事柄は、理解という存在様式との連関のうちで捉えられるの
ではなからうか。

ハイデガーによれば、世界内存在としての現存在は、或る特
定の世界のうちに投げ入れられており (被投性 [Geworren-
heit])、内世界的な存在者との交渉に没入しつつ (頹落 [Verfall-
en])、存在することにおいて自らの存在を関心の的にしてい
る (実存性)。こうした現存在の存在は、関心 [Sorge] と名

付けられる。世界内存在として実存することにおいて現存在は、
氣分づけられて在る自己を見出すのであり、そのような開示性
が、情態的 [bezüglich] な理解である。この理解のうちでは、
自らの存在の目的 [Worumwillen] と世界の世界性としての
有意義性 [Bedeutsamkeit] とが開示されている。このような
理解という存在様式が、現存在の実存を可能にしているのであ
る。

そもそも理解とは、或るものを或るものへと企投すること
[Entwerfen] であり、特に実存論的意味での理解は、現存在
の自己を可能性へと企投することである。つまり、理解という
存在様式において、現存在の存在が、その存在の目的と世界の
世界性へと企投されるのである。現存在は、そのような企投と
しての理解のうちであらわになる可能性として存在することにな
る。しかも、現存在は被投的であるから、理解は被投的企投
として、そのつど最も固有な事実的な可能性へと自己を企投す
ることだといえる。このような企投としての理解が現存在の実
存性を構成しているのであり、特に企投の先行性が、「自己に
先立つ」という実存性の本質的性格の根拠であると思われる。

また、企投としての理解の仕上げが解釈 [Auslegen] であり、解釈においては、或るものが或るものとして把握される。

このとき、解釈されるものは先行的に理解されていなければならない。ここに理解の循環構造が見られるが、この循環構造は理解の企投構造にもとづいていと考えられる。つまり、実存論の意味での企投は、自己を可能性へと企投するというところから、それはつねに現在における自己に先立っている（先行性）のだが、そのために、そのような企投は予めすでに或る特定の世界を開示してしまう（既存性）のである。こうした企投の先行的かつ既在的な現象が、理解の循環構造を構成しているといえる。そのような循環構造は、現存在の存在体制の根本構造として、現存在の可能性の制約であろう。

ところで、現存在の根本的な存在様態としては、本来性と本来性とは可能であり、本来的な理解とは、現存在が自己をその存在の目的 [Worumwillen] へと企投することによって自分自身として実存することである。そのような仕方では、現存在は、究極的で追いつけない可能性としての死へと不断に先駆的に関わる（死への存在 [Sein zum Tode]）。現存在が、自らの被投性を引き受けることによって、自分自身で現に在るのではないということの根拠となることを、ハイデガーは、負い目があること [Schuldigen] だとするが、最も固有の負い目があることへの自己企投が、覚悟性 [Entschlossenheit] である。そして、不断に死という究極的な可能性へと向かって在る

覚悟性（先駆的覚悟性）こそ、本来的な実存である。

本来の実存としての先駆的覚悟性は、現存在の根源的で本来的な開示性である。そのような先駆的覚悟性、すなわち、最も固有の存在可能性への自己企投（本来的な理解）においては、可能性を持ちこたえつつ、そのような可能性のうちで自己を自己へと到来させるという現象（将来 [Zukunft]）が経験される。また、先駆的覚悟性において被投性を引き受けるということとは、現存在が、自分がそのつどすでに存在したように本来的に存在しているということであるが、このことは、現存在が自己の既在 [Gegenwart] で在りうるということにもとづいている。その意味では、最も固有の可能性へと到来することは、同時に、最も固有の既在へと帰来することである。さらに、現存在は、世界内存在として、内世界的な存在者を現前化 [Gegenwartigen] している。ハイデガーは、このような将来、既在性、現前化（現在）を統一している現象、すなわち、既在しつつ現前化する将来としての統一的な現象を、現存在の時間性 [Zeitlichkeit] と名付けている。

さて、理解という存在様式は、自己を可能性へと企投することであるから、このような企投としての理解においては、既在的な自己から可能性としての自己への到来、すなわち将来という現象が経験されることになる。したがって、企投としての理解は将来的であるといえる。しかも、現存在の本質は実存性であり、その実存性は企投としての理解にもとづくのであるから、

現存在の時間性という現象は、将来をその中核にしていると考えられよう。この点が、ハイデガーのいう時間性の本質的特徴であるといつてよい。

時間性の構造契機のうち、自己から可能性への到来としての将来は、「自己に先立つこと」(実存性)を根拠づけ、事象的存在においてかつてすでに在った仕方であることとしての既在性は、「世界のうちにすでに在ること」(事象性)を根拠づけている。また、内世界的な存在者を現前させることとしての現前化は、「内世界的な存在者のもとにあること」(頽落)を根拠づける。こうしたことから、現存在の存在としての関心は、時間性のうちで根源的に統一されていると考えられ、したがって、現存在の存在の意味は時間性であるといわれうる。ところで、存在可能性への自己企投は、死という可能性への存在として、終局によって限定されており、その意味で有限である。それゆえ、現存在の存在意味としての時間性に関して、将来は有限であるといえる。このような将来の有限性こそ時間性が現存在の存在意味であることの証左であると思われる。

現存在の時間性は、脱自的・地平的に時熟することによって、世界と自己とが開示しあう地平を先行的に開く。このような仕方では、現存在が世界へと自己を越え出て自己を理解することが可能となる。その意味で、時間性は、実存論の意味での理解の可能性の条件であるといわねばならない。

かつてアリストテレスは、時間を、前と後に関しての運動の

数ないし今の連続として捉えたのであるが、ハイデガーによれば、それは通俗的な時間理解にとどまっている。ハイデガーは「今 [Jetzt]」「そのとき [Dann]」「あつたとき [Damals]」という言明の日付可能性 [Daterbarkeit] が時間性の脱自的体制の反映であることを指摘し、そのような言明のうちに解釈され言表されている事柄を時間だとする。つまり、日付可能な時間的言明は、現存在の時間性から発源しており、根源的には時間性自身が時間なのである。ハイデガーにとっては、本来性のうちに意味として現出しているものが、一般に時間と呼ばれている事柄自体の経験であると思われる。そして、その事柄は、現存在の存在意味の観点からすれば「時間性」であり、一般に時間と呼ばれる現象が現出するかぎりでは「時間」である。こうしたことから、現存在の時間性は根源的な時間であると考えられる。

このような時間は、日常性への反映として日付可能な言明のうちに現れているのであるが、それは、そのような言明において解釈されている現存在の自己に相当している。その意味では、根源的に時間は現存在の自己の表現であるということになる。もっとも、時間は現存在の自己の表現であるといったところで、時間とは何かという問いに答えることにはならない。ここでは、根源的な意味で時間という事柄が構成される仕方が知られるにすぎない。

根源的に時間が現存在の自己の表現であるということは、純

粹直観としての時間の解釈によって裏付けられる。ハイデガーは、カントの『純粹理性批判』を形而上学の基礎づけと見なし、感性と悟性という二つの幹の根が構想力であって、それが根源的時間であるという。純粹直観としての時間は、純粹な自己觸発であり、なにもものにも依らず自己自身に關係しなければならぬ。このような純粹自己觸発という事柄は、いわば自発性と同時に受容性をも含むものとして、有限的な自己性を表現しているといえよう。そして、そのような有限的自己性は、人間的現存在の主観性の本質構造にはかならない。したがって、最も内的な本質における自己が時間自体であると考えられるのである。時間という事柄を根源的な意味で現存在の有限的な自己の表現として捉えることは、「時間」のひとつの実存論的解釈といえるであろう。

ハイデガーは、時間が時間として構成される最も根源的な現象を、死への存在として実存する現存在の本来性のうちに求めた。現存在の存在体制を可能にする時間性は、現存在の有限性を表しているのだが、現存在に固有の時間という事柄は、そのような時間性であろう。その意味で、現存在の時間性は、根源的な時間であるとともに、現存在の有限的な自己を表す事柄だと思われるのである。